

# 現代詩

## スノードーム

硝子の向こうで浮遊する  
集団は見せかけで  
生きるリズムは個々に  
絡まったままの触手は  
そのままがいい  
その場の空気感  
瞬時によりとく能力  
もう動くことのない  
そのからだは  
真つ白な雪と同じく  
降り積もるならば  
かまくらをつくりたい  
丸みある命がふくらむ  
衝撃をあたえても  
割れることなく  
さらさら舞う  
楽しむ心は軽やかに  
過ぎ去る記憶は鮮やかに

おぐり あつこ

## 友よ

佐藤 裕一

友よ

君は 生き延びるために  
右腕を 付け根から切り落とした  
左腕一本の君の作品は  
並み入る健常者の作品よりも  
精妙で 力強かった

ああ！それなのに

神様は 何を考えていらつしやるのか  
働き盛りの 君の命を召し上げ  
七十を超えた 僕の方を生かし給うた

友よ

いつの日か 生まれ変わって  
君と再会できるのだらうけれど  
今はただ 向こうの世界での  
君の魂の平安をのみ祈らう

## ある日

チズコ・W・クジラ

画廊のガラス越しに見える  
交差点の向こうで「よっ」と手を上げた  
君は 民族調の手織り服  
フリンジをゆらゆらさせて  
信号を渡って来る  
いつもの背広姿とは  
うって変わって別人のようヨ  
手を上げられても判らなかつたワ  
今日のファッションは スケッチブック等  
小脇にかかえ とても様になってるネ  
顔の髭も絵に なってるワヨ

もんべ姿の私をパッとスケッチ  
「どうぞ」とご満悦に  
手渡し、してくれたワネ  
私だけの宝ものダワ  
サンキュウー……!!

## 小さな思い出

中 出 隆 義

幼い頃の思い出は  
川原いっぱい乱舞する螢の灯<sup>ひ</sup>  
一番星二番星 やがて満天の星座と  
長い長い天の河  
小さな小さな無数の光に満ちていた

幼い頃の思い出は  
小川のドジョウ田圃のタニシ  
早朝でくわす鬼やんま  
木の蜜とりあうクワガタ・カブト  
小さな小さな友に溢れてた

幼い頃の思い出は  
泣いてこもった押入れの闇  
お寺に掛かる閻魔と地獄絵図  
町角に飾られた疱瘡団子  
知らない恐さに満ちていた

## 自分以外の誰かである理由

ひ ま わ り

## 辻堂新町の思い出

ヒラサワ タカシ

私は私

他の人とは違う私

だれかと一緒ではない私

誰かになる必要もない

誰かになる必要はない

だって 私は私

他の人ではない私だから

今から7年前 辻堂新町に住んだ

朝 散歩をする 老夫婦と すれ違った  
二人で 手を取りながら 毎日 歩いてた

すれ違いながら 目で追った  
毎日 毎日 通りを 南から 北へ 歩く  
毎日 毎日 黙っていた

ある日 ふと 思った  
あいさつしてみよう

「おはよう ーいごます。」

返事が あった

その日から 友達に なった

ほころぶ

山田にしこ

こんこん

陸井絵夢

寝起きの脳内を活性化させる  
旨いコーヒーが飲みたい

甘く深く濃いテイストの粉は  
UCC珈琲 家庭の味

千里の片田舎の  
サイフォンコーヒーが飲みたい

フラスコの蒸気を

ポコポコと懐かしみながら

布から漏れいずる赤瑪瑙色の

一滴（ひとしずく）に

一時（ひととき）を忘れ得ぬ

職人技の

一杯を

こんこん とをたたくこんこん  
せきばらひ こんこん くみかはし  
こんこん さとされる こんこん  
とめどなく こんこん あふれる  
こんこん なみだのいづみ こんこん  
つきのひかり こんこん まちわびて  
こんこん ちぢにみだれ こんこん  
なくきつね こんこん なみだかれはて  
こんこん ゆめのなか こんこん  
ゆきがふる こんこん ふりつもしり  
こんこん ふりつづき こんこん

一・ 献 献      二・ 懇 惻      三・ 滾 滾  
四・ 焜 焜      五・ 来 ぬ 来 ぬ      六・ 困 混 恨  
七・ 痕 痕      八・ 昏 昏